中国、台湾、シンガポールなどがはるかに物理的に近い距離にあって、人の交流は容易にできると思います。

今回会議を主催した韓国はバイオインフォマティクスの分野にかなり力を入れているようですが、日本もアジアでのリーダーシップを取って、東アジア圏の研究を活性化させて欧米に向けて研究を発信していくべきではないかという感想を持ちましたが。

参考URL: http://biosoft.kaist.ac.kr/bioinfo2005/

■ ICSB2005

「ICSB 2005参加報告」
荻島 創一（東京医科歯科大学大学院システム情報生物学）

システムバイオロジーの国際学会であるICSB(International Conference on Systems Biology)2005は、6月一日を迎え、2005年10月19日から24日にかけて、アメリカのボストンで開催された。会場はHarvard Medical School(HMS)であった。MHSには、203年9月にDept of Systems Biologyが設置されている。参加者は580名ほどで、日本からは20名ほどであった。

口頭発表は1会場で行われ、31発表があり、(1)Biological by Design、(2)Evolution in Action、(3)Intracellular Networks、(4)Dynamics and Multicellular Networks、(5)Mechanics and Scale in Cellular Behavior、(6)Multicellular Networks and Intracellular Dynamicsの6つのセッションから構成されていた。Biological by Designのセッションから始まり、遺伝子発現プロファイルからの遺伝子調節ネットワークの推定、およびperturbation実験からのネットワークモデルに基づく薬剤ターゲットの同定、Intracellular Networksのセッションでは遺伝子調節ネットワークの階層的なモデル構造としての解析、その進化的保存性にまで議論が及んでいる。日本からはRIKENの上田泰己博士が哺乳類の臓器レベルのシステムの同定について発表した。このほか、Evolution in ActionのセッションではProtocell、E.coliや工学的なリポットの進化実験、Mechanics and Scale in Cellular Behaviorのセッションでは分裂細胞での微小な運動のシミュレーションや、Santa Fe InstituteのWest博士によるべき乗りの自然界での普遍性など、実に多様なテーマで活発な議論がなされた。ほとんどの議題は実験データに基づくもので、実験と理論の両輪での研究が活発化されており、システムバイオロジーが生物科学のなかで実質を伴った分野になりつつあることを実感した。

ポスター発表は273発表あり、質問に非常に充実していた。毎晩、口頭発表のセッションの後に、現地ボストンのサミュエル・アダムス、カリフォルニアワインを片手に、自然した議論が活発にされていた。若者の方々の発表が多く、今後の発展が期待される。Closing remarksはHMSのDept. of Systems Biologyの学部長であるKirschner博士がシステムバイオロジーの今後の展開を展望して締めくくった。学術の前後にはチュートリアルやワークショップが催され、満員に続出するなど、こちらも盛況であった。口頭発表のほとんどは、そのスライドと論文がオンラインで公開されているので、興味をもたれた方はご覧になるといいだろう（http://csbi.mit.edu/icsb-2005/）。次回、7回目は第1回開催国である日本の横浜で開催される予定である。

この15年間、急激に続くライフサイエンス分野で常に最先端のインフォマティクス・ソリューションに取り組んでまいりました。これからも・・・